慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	〈真の弱者〉アイデンティティの構築過程： トランプ大統領に至るリベラルな社会への反発を基盤とする政治体の発展
Sub Title	
Author	新嶋, 良恵(Niijima, Yoshie)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2023
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.28 (2023. 7) ,p.123- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2022年度三田社会学会大会報告要旨
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20230701-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈真の弱者〉アイデンティティの構築過程
――トランプ大統領に至るリベラルな社会への反発を基盤とする政治体の発展――

新嶋　良恵

2016年米国大統領選挙においてドナルド・トランプ氏を支持する少なからぬ人々は政治的に目覚めた新しい有権者として表象されていた。トランプ氏によって「サイレント・マジョリティ」と呼びかけられたこの人々は、「繁栄から取り残された」「彼ら」と表象され、その政治的熱狂は奇異のものとしてメディアに取り上げられていた。トランプ台頭を支えたこれらの「忘れ去られた白人」の実態を探るべくラストベルト（さびついた工業地帯）に向かったマス・メディアと研究者が共有した問いとは、この「サイレント・マジョリティとは〈誰か〉」[1]という問いであった。エスノグラフィックな手法による丁寧な取材は、アメリカ社会の中でかつての主流派であった人々の取り残されたといった感情を可視化し、グローバル化の波の中で経済的に取りこぼされた労働者たちの不満の声を記録した。しかしながら、「トランプ支持者」たちは、集合的アイデンティティとして表象されるにはあまりに雑多な人々なのであったことはデータから見るに既知の通りである。政治的に無関心であった白人下層がトランプの支持者であるとの一般化は、実際に共和党へ投票した中間層についての理解を深めるものではないだろう（岡山2017：30）。

そこで本発表では、下層に限らずトランプ旋風を支えた支持者について、生活・個人史として彼らがいかような個人であるのかを探るのではなく、「サイレント・マジョリティ」という表象へとどのように人々がアイデンティフィケーションしていったのか、集団的アイデンティティ創出の過程を整理し報告した。表象と常に照応される形で生成される「政治社会的な主体」を出発点とし、政治コミュニケーション上それがどのような背景の下、生起し、結果として連帯を生んだのか。アイデンティフィケーションの過程をみていくことによって、このような、集合体の創出と、アメリカ選挙史の再検討が可能となるだろう。

これまで、サイレント・マジョリティという語の使用については、過去からの連続性は指摘されてきたが（そもそもニクソン大統領が使った語であるといった指摘）、過去から続く政治性、特に選挙戦略の一環として成した表象の動的側面と結果については、十分に議論されてきたとは言い難い。本発表での試みによってより浮きぼりになるのは、自らを文字通り「物言わぬ大衆（サイレント・マジョリティ）」へと重ね合わせ、呼びかけへと反応する、リベラルな社会運動に反対する人々の機微であろう。白人のもとに「偉大なアメリカを取り戻す」というトランプ氏の主張に喚起された「虐げられたマジョリティ」の声は、60 年代から引き継がれる白人マジョリティ側からの福祉政策批判と近いものであった。同時に、「真の弱者」を主張する声でもあった。本発表では、表象に現われる選挙戦略整理を通して、「良きアメリカ」的大衆こそ自らであるといったアイデンティティを懸げた

新嶋良恵「〈真の弱者〉アイデンティティの構築過程――トランプ大統領に至るリベラルな社会への反発を基盤とする政治体の発展」『三田社会学』第28号（2023年７月）　123－124頁

闘いとしての右傾化について捉えることが出来た。サイレント・マジョリティが構成された大衆という集合的アイデンティティであるからこそ、その創造のプロセスが解き明かしていくことに意味がある。見えてきたのは表象へと収斂されていく雑多な保守の存在であり、実は「真の弱者」とは自らであるという主張に至るアイデンティフィケーションの過程であったが、そこに、諸個人の間での象徴の生産・配分をめぐる対立の契機－すなわち象徴的な挑戦の契機―は残されているはずだ。白人」としてのアイデンティティも交渉対象となった点について考えていくと、現在進行形の事象が民主主義そのものに対する否定だという結論に急ぐ必要はないと考えられる。なぜなら、そもそもそれまで絶対的であった白人アイデンティティが揺らぎ、感情的ともいえる形でアイデンティティの希求が可視化されたこと自体、マスターコードが暴露されている状態であるからだ。

【註】

1　米国社会学者アーリー・R・ホックシールドの言葉を借りれば「壁の向こうの住人たち」（2018）。

【文献】

岡山裕「アメリカの二大政党政治の中の〈トランプ革命〉」『アステイオン―権力としての民意』86号、（CCCメディアハウス、2017年）、29-45頁。

久保文明「アメリカにおける政党政治とアイデンティティ」『アイデンティテと政党政治』（ミネルヴァ書房、2019）25-51頁。

松尾文夫「リベラルから保守へアメリカ政治主流派の交替―ヴェトナム戦争の中で生まれた分水嶺」古矢旬編『史料で読むアメリカ文化史５アメリカ的価値の変容1960年代―20世紀末』（東京大学出版会、2006）214-235頁。

Hochschild, Arlie R. *Strangers in Their Own Land：Anger and Mourning on the American Right*,（The New Press, 2016）.

Nixon, Richard M. “For Excellence, Freedom and Diversity,” condensation of broadcast, CBS Radio Network, October 20, 1968, 10, National Archives, RG 12: Records of the Office of Education, Office of the Commissioner, Office Files of the Commissioner of Education, 1939-80, A1, entry 122, box 383.

（にいじま　よしえ　十文字学園女子大学）